

「帆を上げよ、高く」について その2

尾崎 徹

「帆を上げよ、高く」のモチーフについて。

二番の「春愁のサーカス」の詩の素材となっているのが男声合唱組曲「月光とピエロ」であることは前に述べたが、音楽のモチーフについてもそれを踏襲している。それは2曲目の「秋のピエロ」の『身すぎ世すぎの是非もなく』のメロディに現れる[ソードレミトーファソ…]という音型である。この[ソドレミ(ミ♭)]は昔から私達が聴いてきた音楽には欠かせないモチーフの一つだった。

♪花の街／♪しゃぼん玉／♪赤トンボ／♪浦島太郎／♪チゴイネルワイゼン／
♪荒城の月／♪シクラメンのかほり／♪・・・

それこそ上げればキリはなく、特に音楽の起点（出だし）において多用されてきた。

「帆を…」についてもそれは主に第2曲「春愁のサーカス」と第3曲「帆を上げよ、高く」に出現する。

♪『つきのひかりの…』(P29)

♪『いつてきのなみだが…』『ひとりのぼうけんしゃが…』(P52～P53)

♪『こころざしたかいせいねんよ』(P63以降フーガのテーマ)

♪(3.帆を…、の前奏・後奏のピアノ) (P50 P71)

[ソドレミ(ミ♭)]…この耳慣れた上行音型は、私達にある種のノスタルジーを想起させるとともに、希望や慰めの感情を誘発する力を^{ほら}孕んでおり「帆を…」には欠かせないモチーフとなっている。

もう一つ、[ホールトーン(全音音階)]を使った重要なモチーフがある。

ホールトーンとは1オクターブを6つの全音で区切った音階であり、普通はド、レ、ミ、ファ、ソとなるところが[ホールトーン]では、ド、レ、ミ、ファ♯、ソ♯…となる。無国籍で謎めいたメロディに感じられ、例えばテレビの幼児番組で謎の世界へ行く場面があるとすればその時によく流れるあのちょっと不思議なメロディである。

「帆を…」では以下のところで顔を出している。

P20 練習番号G ♪『そらをかけろ』『かぜを知れ』

P60 85,86,89小節 女声 ♪『うなばらを』『あらなみを』『なみのおとが』

P70 188から189小節にかけてのピアノ譜

この音階、メロディアスな節のなかで突然現れると予想を覆すある種の浮遊感をもたらし、私達をまた違った世界へと誘ってくれて心地よい。

[ホールトーン]も[ソドレミ(ミ♭)]も言わずと知れた[ドレミファソ]の発展形であり[ドレミファソ]を基本のモチーフにすればそこから様々なあらゆる展開が可能となる。第1曲「翼よ、お前の空を翔ろ」はその全ての可能性を生かした曲と言える。言い換えれば様々な[ドレミファソ]だけで出来上がっているのがこの曲だ。

信長氏はこの無敵のモチーフ[ドレミファソ]を駆使して全三曲からなる「帆を上げよ、高く」を作り上げた。これはやはり常人の作曲家には成し得ない『^{わざ}技』であると言えよう。